

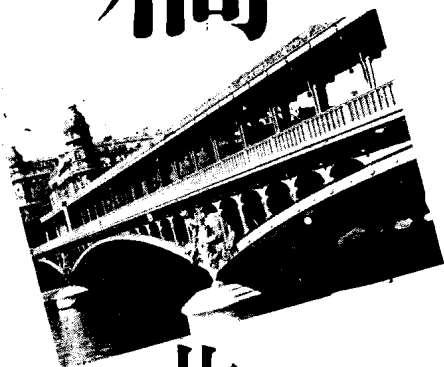


パリの橋

32 Ponts de Paris

北嶋廣敏

がりの橋



北嶋廣敏

北嶋廣敏（きたじま・ひろとし）

1948年、福岡県生まれ。1971年、早稲田大学文学部卒業。

著者 「塚本邦雄論—隠喩のミルワール」『憂愁の見者—続塚本邦雄論』『浜口陽三の世界—愛と円環』『美術論集・美の沐浴』『塚本邦雄論—短歌行為の彼方へ』『林檎学大全Ⅰ 林檎の神話学』『Ⅱ 林檎の現象学』『Ⅲ 林檎の社会学』『聖アントニウスの誘惑』

訳書 クロード・オリエ『治安維持』、レオノール・フィニ『夢先案内猫』

パリの橋

著 者 北嶋廣敏

発行者 中尾是正

発行所 株式
会社 グラフ社

（〒150）東京都渋谷区渋谷1-23-25

電話 東京03-409-4611

振替 東京2-55778

（編集担当 為汲英之）

印刷所 図書印刷株式会社

定 価 1300円

万一、落丁乱丁の場合はお取り替え致します。

© Hirotohi Kitajima 1984, Printed in Japan

パリの橋 ● 目次

	プロローグ	パリの空の下、セーヌは流れる	7
1	ナシオナル橋	セーヌの孤独な凱旋門	13
2	トルビヤック橋	憂愁に満ちた情景	22
3	ベルシー橋	葡萄酒にゆかりの土地柄	29
4	* オーステルリッツ橋	英雄ナポレオンの威光	36
6	シュリ橋	ボードレールの面影	47
7	トゥールネル橋	天国と地獄の塔	55
8	マリー橋	恋人たちの岸辺	66
9	ルイ・フィリップ橋	奥ゆかしさの魅力	73
10	サン・ルイ橋	悲劇は繰り返す	81
11	アルシュヴェシエ橋	大聖堂と死の影	90
12	ドゥーブル橋	「病い」と「神」の象徴	97
13	アルコル橋	ある青年の流した血	104
14	小橋 プチ・ボン	歴史ドラマは尽きず	112
15	ノートル・ダム橋	パリの歴史の目撃者	126

16	サン・ミシエル橋	「青春」が似合う場所	140
17	両替橋	ここを過ぎれば刑場	148
18	新橋	四百年の歳月を生きて	161
19	芸術橋	芸術は永遠に	182
20	カルーゼル橋	さながら貴婦人の気品	190
21	ロワイヤル橋	名橋と美橋の間	197
22	ソルフェリーノ橋	ナポレオン三世の形身	204
23	コンコルド橋	数奇な運命の申し子	210
24	アレクサンドル三世橋	ロシア皇帝の華麗な贈り物	218
25	アンヴァリッド橋	時流に乗り遅れた可憐さ	226
26	アルマ橋	水位計がわりの兵士像	232
27	ドウビリ橋	エッフェル塔の従僕	238
28	イエナ橋	二度の爆破を免れた好運	243
29	ビル・アケム橋	メトロから望む景色の妙	251
30	グルネル橋	パリのなかのニューヨーク	257

31 ミラボー橋 「月日は流れ、私は残る」

263

32 オートウェイユ橋 パリとの別れ

274

あとがき

281

パ
リ
の
橋

プロローグ パリの空の下、セーヌは流れる

四大文明の発祥の例をもちだすまでもなく、都市の発展には常に河が重要な役割をはたしている。江戸（東京）にとつての隅田川、ロンドンにとつてのテムズ河、フィレンツェにとつてのアルノー河、ローマにとつてのテヴェレ河……例証にはこと欠かないが、パリもまたセーヌ河の流れとともに発展している。

テムズ河のないロンドンを想像できないように、セーヌのないパリは考えることができないし、極端にいうなら、パリの歴史と文化のあらかたはセーヌによって育てあげられてきた、といつてよい。

パリパリス揺籃ようらんの地であるセーヌの中の島（シテ島）にゴール人の一部族（パリシー人）が住みついたのは紀元前三世紀ごろのことだ、パリという地名はそこからきている。彼らはいわゆる水上民族であり、水運業、漁業のほか、河の兩岸で狩猟や採取をしながら生活を営んでいた。それはまさにセーヌを十二分に活用した生活であつて、そこにセーヌがなかったら彼らの暮らしは二進にんしんも

三進^{みつち}もいかなかったであろうし、もとよりそんな小島に定着するはずもなかった。

やがて時代が移り、シーザー率いるローマ軍がシテ島をその支配下に置き、続いてフランク族の王クローヴィスがそこをガリアの首都に定めたのも、もとはといえばパリがセーヌという「水(地)の利」を得ていればこそのことであつた。

パリが飛躍的に発展するのは十二世紀に入ってからのことである。その要因として、中世史家のジョルジュ・デュビイは三点を指摘しているが、第一にセーヌの水運をあげている。他の二点とは、教育によって多くの民衆を惹きつけた教師たちの成功と、パリが最良の狩猟場であり、国王たちがこの都市に滞在することをとくに好んだためであるという。おそらく他のどんな歴史家も、デュビイのあげた要因に異論を唱えることはないだろう。とりわけセーヌの水運を筆頭にあげることには、疑問をさしはさむ余地はない。

十二世紀になると、国際的な商取引きの中心としてシャンパーニュの大都市が開かれ、それにつれてセーヌの水運はますます活発化し、河の中心に位置するパリは交通の要衝として重要な役割をになうようになる。

セーヌの水運が活発になると、水運業者たちは水上商人組合を結成してその強化をはかるとともに、政治にも深く関与していく。たとえば、パリの国王代官という高い地位を占めていたのは彼らの代表者であり、今日でいうパリ市長の座を占めていたのも水運業者の大物であつた。このことは、パリがセーヌといかに緊密に結びついていたかを間接的に物語っている。折しも、この頃はじめて市役所が設置されているが、それは水上商人組合の建物のなかであつた。それから

およそ百年後、この市役所は現在の市役所のある場所へ移されることになるのだが、そこはまた小麦や木材などの船着き場のそばであり、つくづくセーヌの水運と市役所とは切っても切れない間柄にある、といえる。こんなエピソードにも、私たちはセーヌとパリの深い縁を読みとることが出来るだろう。

時代が進み、自動車輸送が発達するにつれて、水運は徐々に衰退していった。しかし、そのことによって人びととセーヌの関係が薄れたわけではない。セーヌのはたした役割は単に水運に限らず、パリに生きる人びとにとってはほとんど生活に欠くことのできない存在であり、精神の大きな支柱でもあった。いったいどれだけ多くの人びとが、喜びにつけ、悲しみにつけ、この河と対面してきたことか。

——それなのにセーヌよ、そなたときては無一物、
ただ両岸があるばかり。

どこまでもカビ臭い古本がただ並ぶだけ。
みすばらしい連中がわずかに釣綸垂れている。

だがしかし、夕暮が来て、

空腹と睡気^{ねむけ}で鈍った通行人も稀れになり、

夕日が空に燃えるころ

夢想家ならポロ家^ヤから這^はい出し、

ノートル・ダムのまん前の

市役所橋に肱^{ひじ}ついて、心も髪も風まかせ、

もの思うには快適だ！

ヴェルレーヌ「パリの夜」(堀口大學訳)

セーヌに憩^ひうのはヴェルレーヌだけではない。生きることに疲れたムッシューの、あるいは恋にめざめたマドモアゼルの話し相手になってくれたのも、このセーヌであった。

今日もセーヌはパリの空の下を、人びとの心のなかを流れている。そのことを最も象徴的に表わしているのはパリの紋章であろう。中央に帆船が一隻描かれ、その下に「たゆたえども沈まず」(*fluctuat nec mergitur*)というラテン語の銘が添えられているこの紋章は、パリがいかにセーヌによって育てあげられてきたかをみごとに示している。波に漂う帆船、それは見方によれば、セーヌこそ母になる海であり、パリはそこに浮かぶ帆船の一つにすぎないという、いわばセーヌ讃歌と見なすこともできよう。いや、パリの発展に対してセーヌのはたした役割を考えれば、どんなに讃えても讃えすぎることはない。

+

パリを生み、そして育^{はぐ}んできたセーヌ。セーヌはまさに大いなる母であり、パリの心でもある。とすれば、橋とはすなわち心と直結する動脈というべきか。現在、セーヌには三十二の橋が

架かっているが、セーヌがパリを育ててきたように、橋もまたパリの発展に少なからず貢献している。パリシー人たちがシテ島に住みついた頃にはもちろん一本の橋もなく、セーヌにはじめて橋が姿を見せるのはローマ時代のことである。それから三本、四本としだいに数を増していくのだが、その増えていく過程がつまりはパリという都市の発展の過程でもあった。セーヌがその流れに有為転変の世相を映してきたように、橋もまた時代の目撃者としてパリの歴史をじっくり見定めてきた。

三十二のそれぞれの橋にはその橋ならではの顔があり、固有の経歴がある。洪水のたびに悲劇を味わわなければならなかった橋、一度も壊れることのなかった橋、血の海と化した橋、何度も名前を変えなければならなかった橋、豪華な装飾を身にまとった橋、孤独のなかにたたずむ橋：いずれの橋もそれぞれ異なった生き方をし、さまざまな物語を秘めているが、それらをつぶさにながめていくとき、私たちは橋といえどもそれが一個の生きものであることに気づくだろうし、また事実というものがいかに興味つきないものか感激を新たにするにちがいない。

ゲートは「パリはどの街の片隅にも歴史の断片が眠っている」といったが、断片といわず、多くの歴史が橋には眠っている。とくにノートル・ダム橋や小橋、両替橋などには千年以上の歴史があり、したがって物語性にも満ちて威風堂々たる存在感を保っている。逆に、比較的歴史の新しい、たとえば上流のナシオナル橋やトルビヤック橋、あるいは下流のオートウイユ橋などはなかなか固有の物語をもてないが、それも考えようによっては、歴史と物語に彩られた橋以上の趣きがある。つまり、さっぱりと物語という衣裳を脱ぎ捨て、そこに存在することを唯一の証^{あかし}

としている橋も、それはそうですがしく、かえって好感がもてるのである。少なくとも、私にとってはそうである。これは一種の判官びいきなのだろうか。

†

セーヌには幾隻もの遊覧船が運航している。そのなかの一隻を借り切って、これから橋の遊覧に出かけることにしよう。仮に「パリの橋・歴史遊覧」とでも名づけておこうか。上流のナショナル橋を出発点に、セーヌの流れに漂いながら下流のオートゥイユ橋まで、三十二本の橋をめぐるオプショナル・ツアー。シャンゼリゼやサン・トノレ街をウインド・ショッピングするのも、旅の味わいの一つにはちがいないが、パリに足を踏み入れてセーヌと対話しない手はない。この特別の遊覧船に乗れば橋はもとより、ノートル・ダム寺院もエッフェル塔も新たな角度からながめることができようし、それよりなにより、パリの歴史のもう一つの側面を知ることになるだろう。

ノ
ナショナル橋

セーヌの孤独な凱旋門

セーヌ河は東南フランスのラングル高原に源を発し、途中でオーブ、ヨンヌ、マルヌ、ウールの支流を集めながらパリを通過して、英仏海峡にそそぐ。全長およそ七百七十キロ、そのうちパリ市内を流れるセーヌはわずか十キロあまりにすぎない。全体からみれば七十七分の一でしかないが、セーヌにとつての出来事の多くはその十キロあまりの長さに凝縮されていると言っても過言ではない。

最も古い文献によれば、セーヌ河は紀元前後の頃にはセクバナ河、時代を下って六世紀の頃にはシグナ河と記録されている。現在のセーヌはこのシグナが転訛したもので、シグナとはケルト語のソグハン（ゆったりした河の意）に由来するといわれている。セーヌは高度差が少なく、水量豊富にゆるやかに流れている河で、たしかに名は体を表わしている。また一説には、セーヌは「蛇行」を意味するともいわれる。河の流れ方からすれば、この説も捨てがたい。とくにパリを出たあたりや、レザンドリからゴドベックまでの河の流れは蛇のようにくねくねと曲がり、文字どおり「蛇行」を地でいっている。こちらのほうもまたこちらで、名は体を表わすという言い回

しがそのまま適用できる。

いずれの説が正しいか私にはわからない。別にどちらかを選ばなくてはならないわけでもないから、ここでは「ゆったりした河」も「蛇行」も、セーヌの意味としてとっておこう。

一滴一滴の水がラングル高原でせせらぎとなり、オーブ、ヨンヌなどの支流と合体するうちにやがて一本の豊かなセーヌ河となって、ひたすらパリを目指す。そんなセーヌの流れをシャンソン「ラ・セーヌ」は巧みにうたっている。フラヴィアン・モノー作詞、ギイ・ラファルジュ作曲によるこのシャンソンでは、セーヌは「恋する女」にたとえられ、その相手が華の都パリ——だから、彼女すなわちセーヌは、パリと逢う（着く）まではどうも機嫌がよくない。モノーは「彼女は沈みがち」とうたう。ところが、そんな彼女も憧れの恋人であるパリに会おうと、たちまち陽気に、そして情熱的になってしまう。

パリの街に入ると

セーヌは睦言ちづごとをかわす

花咲く岸辺にまつわりつき

セーヌは甘い言葉をささやく

セーヌは恋をうたう

日ごと夜ごとに

セーヌは恋する女